

2025年5月21日(水)
啓成公民館大学「啓成がくゆう会」



米子の詩人・生田春月

その生涯と作品を楽しむ

春月会代表 上田京子

生田春月（本名・清平）は1892（明治25）年、米子市道笑町に生まれ、苦学の末に詩人、小説家、翻訳家、評論家として多くの作品を残した。1992（平成4）年創設の米子市市民栄光賞に選ばれている。

一 回覧雑誌発行

生田春月日記

春月11歳の時家業の酒造業が破産したため、それまでの裕福なお坊ちゃんから一転して貧乏のどん底に落ちた。この前後には同年配の友人たちと回覧雑誌を発行して楽しんでいて、角盤高等小学校2年の時、授業料が払えなくなり中退した。

一家は借金取りに追われ、日露戦争下の朝鮮に流浪、極貧の生活を送る。16歳の春月は文学で生きることを決意、文芸投稿誌『文章世界』等の入選常連者であることを力に、両親や親戚の反対を押し切って上京した。この時の経緯は15から17歳の生田春月日記が米子市立図書館に寄贈されており、文学を志す春月の熱い思いを知ることができる。そして文学への道を拓いてくれた生田長江との師弟関係が日記から見えてくる。



二 師・生田長江と春月

生田長江は1882（明治15）年、日野郡根雨村に生まれる。東京帝国大学哲学科卒。評論家、翻訳家、作家。成美女学校の閨秀文学会で平塚明（後のらいてう）と出会い、『青鞥』発刊を勧め名付け親になる。ニイチェ『ツアラトストラ』の翻訳に取組み、日本で初めて『ニイチェ全集』全10巻を翻訳した。春月は長江宅の書生兼玄関番のとき、佐藤春夫と同宿する。当時、長江は社会主義者・塚利彦、大杉栄等と親しくなり、文芸批評から社会批評へと活動を広げる時であり、春月もその影響を受けた。

長江は教育家として若い人を育てることに熱心だった。生田春月や佐藤春夫、島田清次郎（『地上』）、高群逸枝等を推し、後に伊福部隆彦（八頭郡智頭町出身）も長江に師事した。

長江は一高時代に彼の宿病となったハンセン病の発症を自覚したといわれる。これは春月が長江のもとを離れる原因の一つとなり、『罪と罰』翻訳の齟齬もあって師・長江から離れていった。

長江は晩年『釈尊伝』の創作を発願、四肢が不自由になり視力を失っても、毅然とした態度で『釈尊伝』（未完）の口述筆記を続けた。1936年、長江は波乱に満ちた生涯を終えた。享年54。



三 第一詩集『靈魂の秋』出版

春月が新進詩人として認められたのは1917（大正6）年、25歳のとき新潮社から第一詩集『靈魂の秋』、翌年『感傷の春』を出版したときである。これは大いに世に迎えられ2作とも60版以上を重ねて大ヒットした。以降10冊以上の詩集を出して版を重ね、その他小説、翻訳、評論と旺盛な文芸活動を展開した。外国語（独語は夜間に一年学ぶ、英語）をはじめ、古典、漢文等は帝国図書館に通い、すべて独学で習得している。室生犀星が「日本の近代詩人の中で、その生前中にこれほど民衆に親しまれ愛された詩人は他に類例をみない」といったように、大正から昭和の初めにかけて活躍し、文芸投稿詩『文芸通報』、『詩と人生』を主宰した。詩論集『新しき詩の作り方』（1918）は多くの若い人を詩の世界に導いたが、これは中国初期口語詩にも大きな影響を与えたのである。

しかし春月の活躍は当時台頭してきた民衆詩派から、民衆受けのする小曲詩人だとして、やっかみともいえる激しい攻撃や批判を受けることになった。春月は当初反撃もしたが、「片隅の幸福」を主張し、終生苦しむことになった。

「文章倶楽部」青年文士録欄にみる私淑文士投票数一覧																	
昭和35年夏 筆者集計 但し、《 》:一位、():二位、[]:三位を示す 廣野晴彦氏作製																	
与謝野晶子	8	10	17	春 月 第 一 詩 集 出 版 (大正六年12月刊)	15	27	16	春 月 訳 『 ハ イ ネ 詩 集 』 出 版 (大正八年二月刊)	29	21	23	26	33	16	26	12	
田山花袋	《90》	[39]	31		[36]	22	20		26	10	21	30	14	3	8	4	
尾崎紅葉	13	13	12		13	32	38		30	25	23	24	19	13	5	1	
谷崎潤一郎	23	14	9		11	16	17		29	18	16	16	10	21	11	9	
生田春月	0	0	0		12	32	14		42	《56》	《87》	《65》	《75》	《62》	《75》	《42》	
夏目漱石	[53]	《53》	(59)		《69》	《89》	《86》		《86》	《65》	《63》	《93》	[44]	(54)	(54)	(26)	
島崎藤村	50	33	[35]		34	[42]	[41]		[43]	31	34	37	(48)	29	[42]	16	
国木田独步	7	11	13		24	33	37		40	25	[36]	37	26	26	22	5	
トルストイ	6	9	10		16	21	21		15	9	18	28	18	14	19	4	
ハイネ	1	0	1		0	3	1		26	27	30	26	29	[32]	27	12	
北原白秋	2	3	3		3	16	23		28	25	23	26	30	18	32	[23]	
佐藤春夫	0	0	0		0	0	0		4	2	6	1	2	4	3	2	
若山牧水	6	7	9		9	19	16		12	21	20	25	30	18	26	7	
徳富蘆花	(74)	(51)	《67》		(66)	(60)	(63)		(50)	[41]	[36]	[52]	19	22	16	8	
芥川龍之介	0	0	0		4	12	9		15	1	8	6	7	8	5	3	
文士名	後期	前期	後期		前期	後期	前期		後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	
年度	大正5年	大正6年			大正7年		大正8年		大正8年	大正9年		大正10年		大正11年		大正12年	

四 『周作人と日本近代文学』于耀明著 第七章「生田春月の『新らしき詩の作り方』と中国初期口語詩」

周作人（魯迅・周樹人の次弟）は1918年11月、春月の『新らしき詩の作り方』を日本から取り寄せた。この著作の主眼は「韻律には形式のリズムと内容のリズムとの二つがあります。七五調などといふのが形式のリズムで、内容律（又は内在律、心律）は即ち内容のリズムに他ならない。（略）内容のリズム（即ち内容律）は、詩人の呼吸そのものであり、詩人の肉体そのものであって、それはその内容その思想感情と引き離す事の出来ないものであります」等、形式的文語詩から口語自由詩を勧めるものでもあった。

中国には古来3000年に及ぶ漢詩の歴史があるが、周作人は春月の著作から大きな影響を受け、中国の新しい無韻の新体詩「少河」を発表する。周作人は中国の現状に対する屈折した想いと反抗心を、詩人の生命表現として昇華、表現したのである。「小河」は「新しい詩」の最初の傑作とされ、中国近代詩における新しい詩の歴史に不動の地位を得たのであった。

五 ハイネほか翻訳の仕事から見えるもの

1 ドイツ語、英語の習得

生田長江の世話で「文章講義録」（新潮社）の仕事を得て独立した20歳の春月は、独逸語専修学校の夜学に1年通い、独語を習得した。春月は翻訳することによって語学力を高め、在学中から翻訳を始め、「新潮」に発表している。その後英語も独学で習得し、その努力と並々ならぬ才能もふくめて、長江は「春月君は語学の天才」だと言っている。

2 ハインリッヒ・ハイネ(1797~1856)の詩の全訳

『ハイネ全集』第1、2巻（越山堂）は春月が日本で初めてハイネの全詩（後に春秋社から3巻本が出る）を訳した。これはハイネの抒情詩的な一面だけでなく、ハイネがドイツにおいて熱烈な反逆児であり、社会詩人、革命詩人であったことを日本で初めて紹介したものである。この点においても評価されている。



○ 富士川英郎(東京大学名誉教授)「生田春月の詩集」(1982)

「春月の『ハイネ全集』は単にその中に収録された詩の数が多かったというばかりでなく、全篇平易な口語で訳されていることに、その著しい特色があった。ハイネの詩の口語訳は春月にはじまると言ってもよいだろう。（略）時事詩や社会詩を多く訳出して抒情詩人ハイネという、明治以来、固定しかけていたハイネ観を修正したことは注目に値する。」

○ 小松伸六(立教大学教授)『美を見し人は』(講談社 1981)

「外国作品を実に多くよみ、翻訳し、紹介もしているのは、野にあった多力者生田春月だ。とくにハイネに関してはアカデミーのなかにいたハイネ・フオルシェア（研究家）にくらべて遜色はなく、むしろ当時は第一人者であったと、ドイツ文学者のはしくれである私は確信している。」

3 春月にとっての翻訳

明治・大正時代の翻訳の背景として当時は翻訳された文学作品は啓蒙の一環であり、欧米の文化的な背景を知ることが目的であった。文学的価値や歴史的背景を問うことなく、欧米で有名な作品と言われるものが翻訳された。このような時代に春月にとって翻訳はどのような意味をもったのだろうか。

○ 春月が文学で生きるため、つまり筆一本で生きていくため文学者として収入を確保し生活を支える必要があった。翻訳は学歴をもたない春月の誇りであったが、同時に生活のための売文ともとらえていた。

○ 異国の詩人や文学者、哲学者に寄せる春月の憧憬や愛や関心が、彼の勉学や文学的希求と一致していた。若い日から親しんだハイネの全詩を日本で初めて訳したのは、春月の功績である。ハイネは抒情詩人から出発したが、プロシヤの旧体制と闘い続けた社会詩人である。春月もハイネと同じ道を歩んだ詩人であった。

○ 語学習得即ち翻訳は、春月が魅了された世界の文学や思想に、原作から直に読みとる夢の実現だった。そして誰よりも早く西欧の文学事情を知り、それを自らの文芸評論に活かしたのである。

4 春月の主な翻訳一覧

『はつ恋』、『散文詩』ツルゲエネフ、『罪と罰』ドストエフスキイ、『マルヴ』、『強き恋』ゴオルキイ、『海の嘆き——ポールとエルジニイ』サン・ピエール、『少女の誓』シャトオブリアン、『ハイネ詩集』、『ゲエテ詩集』、翻訳編詩集『泰西名詩名訳集』、『饗宴』プラトン、『ハイネ全集』第1~3巻、訳詩集『私の花環』、『ロングフェロオ詩集』、『バーンズ詩集』、『北欧三人集』、『猫橋』ズーデルマン。

六 春月文学と郷土のつながり

1 投稿文芸誌『白熱』木田仁学編・発行の支援(八頭郡池田村・現若桜町)

大正期は個人が社会に目を向け、社会の中で個を確立していく過程において、デモクラシーの波に洗われた時代である。この過程において個人の意識は社会と対立することにもなった。それは文芸においても同様である。鳥取においても吉村撫骨や白井星影(喬二)、峰地光重らが『回覧』雑誌による文芸活動を始めている。

大正時代前期、生田春月の名は中央文壇で活躍が伝えられるようになる。春月の詩集は広く読まれ、『文芸通報』、『詩と人生』の主宰者でもあったことから、当地方の文学青年にも憧れの郷土出身の詩人であった。木田仁学は投稿していた『文芸通報』が終刊になることをと知り、八頭郡池田村の地元で文芸雑誌を起こしたいと思った。そこで木田は「生田春月先生に打明けて生田先生なり門下の田口兄なりに後援を仰いだことによって初めて『白熱』が生まれた」と『白熱』に記している。

『白熱』は春月の『詩と人生』会員の支援もあり、2年目あたりから全国的に広い支部を持つようになり、大正12~15年まで約4年、第29号まで続いた。大正期は文芸の黄金期といわれるが『白熱』の文芸活動は、地方の隅々まで文学熱が広がり、郷土出身者の活躍がその地方の文芸活動に力を及ぼしていたことがわかる。

2 長編小説『相寄る魂』に寄せる春月の郷土への思い 上中下(全四巻)新潮社(1921~24)

小説の舞台は東京と郷土・米子、淀江、松江、美保関等である。物語は理想の文学をめざして主人公・龍田純一は東京を目指した。純一は東京で詩を発表し、文壇に足がかりをつけて詩集を出版することができたが、文壇の裏面を見て驚き、失望する。文学に生きる夢に挫折し米子に帰郷した純一は、家のために犠牲となり大富豪と愛のない結婚に鬱々としていた彼の初恋の人・敏子と再会する。二つの魂は相寄り相救いながらも、世に容れられず破滅する。

これは純一が当時の社会の荒波に翻弄されながらも、汚れることのなかった彼の魂を大切にしつつ、大正デモクラシーの波とともに社会的変動の中をどのように生きようとしたのか、春月の精神史的な人生録といえる作品である。

春月は『相寄る魂』について「これは私独自の愛の哲学を説いたもので、私の愛の賛歌である」、「私の意図はこの世界よりも一段高い世界に適合すべく生れた人間が、いかにこの世界で破滅しなければならぬかを、その悲痛な経路を描くのにあった」という。そして別の視点から「アンデルセンの『即興詩人』のように小説によって郷土を紹介したかった」と述べている。



3 小曲詩集『麻の葉』(玄文社 1922)

『麻の葉』は『相寄る魂』を完成させた春月が13年ぶりに帰郷、故郷を小曲の調べにのせて、抒情豊かに恋心を込め、春月には異色の作品である。春月は米子で大歓迎を受け「われは水草たよりはなすが 風にゆらいでのびのびと」と歌っている。「私の心がこんなにもふる里を思い、伸々とした心になったことをみせた点で、とても好きな作品集である」と言い、若き日の故郷の思い出や出雲地方を小曲にうたっている。

七 自死

春月の思想は若いころキリスト教的人道主義に向い、一転してニイチェの権力意志説に引かれ、社会主義思想に近づき、禅に心を寄せ、そしてまた〈片隅の幸福〉を願った。だが春月の思想の根底には常に懐疑、そして虚無がひそんでいた。「あるニヒリストの手記」（「文芸思潮」1925）に「僕の中には、イデアリストとニヒリストが同居している」と言う。春月はこの二元論に苦悩し、自ら目指した真の詩人として生きることができないという絶望にとらえられ、希望と絶望の間を駆け抜けていった。

1930年5月、『世界文学全集』（新潮社）「猫橋」の翻訳を脱稿した。疲労が激しく保養に向かうと称して友人、愛人等と逢い、5月19日別府行き葦丸から投身、38年の生涯を閉じた。船中作の「海図」が遺稿詩となる。没後、遺稿詩集『象徴の烏賊』（第一書房）、『生田春月全集』全10巻（新潮社）が出版された。

八 生田春月詩集一覧

1917	第一詩集『靈魂の秋』（新潮社）	1923	小曲集『夢心地』（新潮社）
1918	第二詩集『感傷の春』（新潮社）	1924	抒情小曲『物思ひ』（素人社）
1919	詩集『春月小曲集』（新潮社）	1925	詩集『自然の恵み』（新潮社）
1922	詩集『慰めの国』（新潮社）	1928	詩集『春月詩集』（新潮社）
1922	詩集『澄める青空』（新潮社）	1930	遺著『象徴の烏賊』（第一書房）
1922	小曲詩集『麻の葉』（玄文社）	1931	長編詩『時代人の詩』（新潮社）
1923	詩集『春の序曲』（交蘭社）		

九 春月の詩より

象徴の烏賊

或る肉体は、インキによって充たされている。
傷つけても、傷つけても、常にインキを流す。
二十年、インキに浸った魂の貧困！
或る魂は、自らインキにすぎぬことを誇る。
自分の存在を隠蔽せんがために
象徴の烏賊は、好んでインキを射出する。

或る蛇は、常に毒液を蓄えてある。
至大の恐怖に駆られると、蛇は噛みつく。
致命の毒を対象に注入しながら
自らまた力尽きて斃れる早魘の河！
或る蛇の技術は、自己防衛とその喪失。
夏夕の花火、一瞬の寵と天上する。

或る貝は、海底に幻怪な宮殿を築く。
あらゆる苦悩は重く、不幸は塩辛く、
利刃に刺された傷口は甘く涙を流す。
或る真珠の涙は、清雅な復讐である。
奸黠な商売の金庫に光空しく死せども、
美しい夫人の手に彼の涙は輝く。

或る植物は、常にじめじめした湿地に生え、
その身をあまりに夥多なる液汁に包む。
深夜、或る暗い空洞から空洞へ注ぎ込まれ、
その畸形なる尻尾を振って游泳する。
或る菌はしばしば死と復讐の神である。
漠雲の中哄笑する、目に見えぬものは神である。

海浜にて永遠を思ふ

ひとり海浜に立つて、寂寞のうちに永遠を思ふ。
流沙海を埋めて遠浅をつくり、広き磯をつくりて、
磯はやがて砂畑となりし海辺にたたずみて、
腫をひろくはなせば、大山は紫にかをり、
低く左に船上山並ぶ。
かの山の麓こそ、上代の海なりしならずや。

今われここに立つ、
ただ見る近き砂原に
海高鳴りて身を寄する。

ひとりその海の音聞きて
静かにわれ永遠を思ふ。
ここわが立てるこの砂浜よ、
幾星霜ののち、幾百幾千の歳月の後、
やがて山か野か、流れか原か。
飛ぶ鳥に問ひよれども、
鳥は答へず、這ふ蟹に聞けども、
蟹もかたらず。

さびしさよ、あかき秋の日、
波の音に、ふとわれは覚ゆ、
永遠はわがとりにあるにあらずや、
いな、わが裏にあるにあらずや。

『澄める青空』